

美術館から

お元気ですか。

僕は出張でここに来ています。

藤田さんは驚くかもしれないけど、僕は美術館が好きなんです。

ひまがあると、美術館に遊びに行きます。

ここで、学生時代に教科書で見た絵と、ご対面しました。

さすがです。

やっぱりいい。

会社の近くのブリヂストン美術館だったら、僕はセザンヌの青い空の絵を見るのが好きです。

あそこには、一枚皮の、いい椅子があるので。

椅子に座って、セザンヌを眺めていると、田代課長に怒られたことも、忘れるわけではないけれど、そういうもんかなあと考えてきます。

田代課長の家にも、あんなにいい椅子はないだろうし、セザンヌは絶対ないだろうから。

アドレス、知っててごめんね。

実は、以前に藤田さんのデスクにメモがあって、覚えていたんだ。

一回だけ、藤田さんの住むマンションも見に行きました。

ストーカーみたいなことして、ごめんね。

藤田さんが、ここから出勤してるんだなあと眺めていました。

その一回だけです。

僕は、藤田さんが好きでした。

この間の歓送迎会で、酔ったふりをして、藤田さんをくどいたでしよう？

見事に振られました。

そりゃそうだよな、となんだか納得しました。

藤田さんは、社長お墨付きの美人といわれているくらいだから。

お手付きじゃないからね。

前々から辞令が出ていて、僕は、

「母の検査結果が、まだ出ないものですから」と人事部に交渉していました。

僕の母こそいい迷惑で、福島で元氣ぴんぴんしています。

お調子者で、田代課長に怒られてばかりいる僕ですが、人生を賭けてでもやらなくては、と思う時があるのです。

藤田さんの気持ちを知りたかったのです。

結婚なんて言っていないよ。

そんな恐れ多いことは言えません。

でも、遠距離恋愛くらいは、なんて僕の妄想は広がっていました。

先週、人事には「母は元気です」と言ってきました。

来週には異動です。

藤田さん、いつも素敵なお顔をありがとうございます。

藤田さんは営業も断トツだから、営業部長も僕なんかには見せたことのない態度をとるんだよね。

うらやましいなと思っていました。

あの恥ずかしいプロポーズをしたあとだから、藤田さんにアドバイスをできます。

見事に振られたんだから。

誰かの悪口を言っているわけじゃないと。

八つあたりでもありません。

藤田さんが部長を好きなのを、僕は知っています。

部長は男から見ても、かっこいいし。

藤田さんが怒って、

「そんないやらしい気持ではありません！」と鼻息荒く僕に迫りそうですが。

確かに、藤田さんはそうでしょう。

しかし、藤田さんがそういう気持ちだと、部長だって嬉しいんです。

誰だって、藤田さんに「尊敬してます」と見つめられたら、狂います。

部長は普通の男です。

それが悪いわけではありません。

ただ、部長は傷つかないかもしれないけど、藤田さんは絶対傷つきます。

不倫にしかありません。

お願いです、藤田さん、自分の眼差しで自分を傷つけないでください。

僕のおふくろは「ゆれる眼差し、ゆれる二の腕」とあまった贅肉をゆらしていました。

そういう奴なら、部長もおかしくはならないんですが。

近頃の美術館は、しゃれた小物を売っています。

メモ虫という、メモクリップとペン立て兼用の面白い小物がありました。

ワイヤーのシンプルな写真立てもありました。

期待しないでね、藤田さんに送ってはいません。

金がないし、「俺は振られて、メモ虫だけは藤田さんのところかよ」といじけそうですから。

藤田さんたちと時々立ち寄ったあの店にも、面白い小物がありましたね。

僕は、からくりベルサイユ宮殿というのぞきメガネが面白かったです。

課長は、万華鏡を見るふりをして、藤田さんを眺めていたんですよ。

あそこでおしゃべりしたのが、懐かしい思い出です。

藤田さんと並んで座ったんだから。

あの椅子、本当は家に持ち帰りたかったなあ。

藤田さん、元気でいてください。

藤田さんが結婚しようが、独身でいようが、僕のおふくろみたいに、どしどしと歩く中年女になろうが、僕は大好きです。

さようなら。